

# 題目 大学における e ラーニング

指導教官 山口健二

発表者 上田奈緒子

## I 題目設定の理由

インターネットは一瞬にして世界をつなぎ、様々な情報を収集することを可能にした。IT の普及によって、教育にもこの技術を利用しようという動きが見られる。その中でも大学にはどのような影響を与えているのか、e ラーニングを中心に考えていく事で IT の教育利用に関して考えを深める事ができると思い、本題目を設定した。

## II 論文構成

- 第1章 高度情報化社会における大学の変化
  - 第1節 学習機会の拡大
  - 第2節 大学における制度的変化
  - 第3節 遠隔教育
  - 第4節 バーチャル・ユニバーシティの登場
  - 第5節 e ラーニングとは
- 第2章 アメリカにおける e ラーニング
  - 第1節 普及状況
  - 第2節 急成長する要因
  - 第3節 教育機関の構造・役割変化
  - 第4節 教育の質
  - 第5節 コスト

- 第3章 日本における e ラーニング
  - 第1節 普及状況
  - 第2節 日本の e ラーニングの特徴
  - 第3節 e ラーニングを可能にする鍵
- 第4章 最後に
  - 第1節 グローバル化する e ラーニング
  - 第2節 日本の将来

## III 論文の内容

### 第1章 高度情報化社会における大学の変化

高度情報化社会の中でマルチメディアの進歩により、学習の機会が拡大すると共に、大学にも様々な変化をもたらした。1996年の『マルチメディアを活用した21世紀の高等教育の在り方について』という報告書は、大学設置基準の改定、それ以降の制度的変化を導いた。1998年『大学設置基準』の改正によって通信制の課程だけではなく、通学制の課程においても遠隔教育を実施することが可能になった。遠隔教育も、マルチメディアの進歩によりその形態を変えてきた。様々なマルチメディアの中でも、特にインターネットが遠隔教育に与えたものは大きかった。今まで、コミュニケーションのとり方が一方向であった遠隔教育が、双方向になり、また、コミュニケーションを同期でも非同期でも行うことが可能になったのである。インターネットは、時間と空間とコミュニケーションの観点で、柔軟性があり相互作用頻度も上がることで、さらに廉価であるということも加わり、今では遠隔教育における主流のメディアとして広がっている。このような流れの中で IT を利用して教育の配信を行うといった意味でバーチャル・ユニバーシティ、オンライン教育、さらに e ラーニングという言葉が次々に登場してきた。大学という組織から、そこで行われる教育へ、さらには教育を構成する教授・学習過程への着目と、どんどん焦点化されているようだ。また、大学の教育改革として e ラーニングを利用するためには、教育を行う側、受ける側の意識改革が必要不可欠である。

### 第2章 アメリカにおける e ラーニング

アメリカは、もっとも早く IT 化が進み、高等教育においても e ラーニングがもっとも普及している国である。ここでは、e ラーニングの先駆けであるアメリカについてみることで、e ラーニングの特徴を見つけていくことにした。アメリカにおける遠隔教育は100年余の歴史があり、インターネットによる e ラーニングは、こ

れまでの遠隔教育に代わる新たな配信技術として脚光を浴びているという背景がある。遠隔教育の配信の技術にインターネットを利用していると回答している高等教育機関は、1995年にはわずか14%でしかなかったが、1997年には77%と、アメリカのeラーニングは急速に普及したと見ることができる。このように急成長する要因として、「需要側の要因」と「供給側の要因」の2つの視点から考えることができる。さらに、eラーニングが高等教育に普及することによって教育機関の構造・役割の変化も生じてきた。また、教育の質に関する問題ではディプロマ・ミルという学位製造販売業者が登場してきた。学位の発行は大学の専権事項であり、修了証明としての学位は社会的に価値があるものであり、他機関が発行する学位とは価値が異なる。そこで、質の保証・評価をめぐる議論に対し、ア krediteーション団体は共同でガイドラインを作成した。最後に、eラーニングにかかるコストについてeラーニング・コースを提供する側と、受ける側からみている。

### 第3章 日本におけるeラーニング

本章では、日本におけるeラーニングとはどのようなものなのかを探っていく。特に、前章のアメリカにおけるeラーニングをもとに日本のeラーニングの特徴を見ていくことにする。日本の大学では、インターネットによる授業の配信を行っている機関は2003年で16%、2007年で21%とあまり高い数値ではないが、上昇傾向にある。しかし、こうしたコースによって単位を認定しようとしている機関は2003年で4%と驚くほど少ない。このように日本のeラーニングが普及しない要因として、「教員の無理解や協力体制の欠如」、「教材作成の支援の問題」、「大学全体のIT化やそのための学内体制の構築という観点の弱さ」の3つをあげた。さらに、日本のeラーニングの特徴としては、講義型のeラーニングが主流になっていること、対面授業との組み合わせによるブレンディッド・ラーニングという形態であることがあげられる。最後に、eラーニングで単位認定する授業をしている日本の大学から、eラーニングを可能にしている秘訣を探る。秘訣の鍵として、技術、コスト、教育効果の3つを取り上げている。

### 第4章 最後に

世界の高等教育は、「学位のグローバル化」に直面している。以前までは、国民国家内に閉じていることを前提としていた教育活動は、時間と空間を圧縮するITを利用したeラーニングによって国境を越え、海外の教育市場へと上陸している。この背景には、「高等教育需要の増大」、「供給の世界的な規模での不均衡」の2つの要因が存在していた。世界の高等教育人口に占める発展途上国の高等教育人口は1970年で25%、1997年で50%と急増している。これらの教育需要を全て国内供給で満たすことは困難である。そこで、人ではなく教育が移動するという方法であるeラーニングを用いているのである。また、eラーニングによる高等教育のグローバル化は、供給側の英語圏と、需要側の発展途上国という関係の中で進展していることが見えてくる。ここでも問題になるのが、質の保証である。高等教育機関が国籍を持つ場合は、それぞれの国家からの認定を受けることで質の保証に備えることができる。しかし、無国籍の高等教育機関であるUniversitas21 Globalは、ビジネス教育の質向上のための非営利の情報・研究機関であるEFMDが開発したeラーニングの質保証のための資格であるCELを取得することで学位の正当性を主張するほかないようである。最後に、アメリカのeラーニングから考えられる日本のeラーニングへの暗示を、「需要の問題」、「供給の問題」、「コストの問題」、「教育の質の問題」の4つについてまとめた。アメリカの教育制度や教育システムとは異なる日本で行われるeラーニングがこれからどのような道をたどっていくのか、今後の課題としたい。

### VI 主要参考文献

- 文部科学省メディア教育開発センター2001, 『教育メディア科学ーメディア教育を科学するー』 オーム社  
吉田文 2003, 『アメリカ高等教育におけるeラーニング 日本への教訓』 東京電機大学出版局  
吉田文ほか 2005, 『大学eラーニングの経営戦略 成功の条件』 東京電気大学出版局  
吉田文ほか 2005, 『模索されるeラーニング 事例と調査に見る大学の未来』 東信堂